

2021春号テーマは...

『次代を担う若手経営者』

地域に根付き、盛り上げる広島の力。
今回は、老舗を受け継ぎ、独自の視点で
未来を見据える若い二人を訪ねました。



竹森 祐太郎さん

1988年生まれ。大学卒業後、1年間パンクーバーに滞在。2012年に入社し、現在は専務を務める。熊野筆事業協同組合および熊野町商工会青年部所属。



業界で初めて手掛けたシルバーフォックスのシリーズ。前例のないキツネの毛を用いた筆は、これまでにない上質な風合いに。希少性の高い美しい毛色に、木目の風合いを活かした無塗装の木軸を組み合わせたデザインも秀逸。

筆の世界にも次世代を担う若手経営者がいる。伝統工芸の町、熊野を代表する筆工房の一つ「竹宝堂」で専務を務める竹森祐太郎さんだ。

細部を描く面相筆を得意とする竹宝堂の技術をメイクブラシに活かせると考えたのが、優れた筆職人でもあった2代目の鉄舟さん。職人の育成と創作に打ち込むことにした鉄舟さんの後を引き継ぎ、現在は熊野筆事業協同組合の理事長を務めるのが3代目の臣さん。祐太郎さんは父である臣さんを、海外経験や若い発想で支えるのが4代目である。

世界中の人に魅了する熊野筆の肌触りは、天然毛の先端で美しく形づくられる穂先から生み出される。それは人工毛や機械化で実現できるものではなく、細やかな人の手と経験を要する。また時代と共に質の良い天然毛の調達も難

世界中の人を魅了する熊野筆の肌触りは、天然毛の先端で美しく形づくられる穂先から生み出される。それは人工毛や機械化で実現できるものではなく、細やかな人の手と経験を要する。また時代と共に質の良い天然毛の調達も難



産地や年度によっても質感が異なる天然毛。均一の品質になるように選毛・混毛する技術、逆毛や傷んだ毛を取り除く精毛技術など、経験を要する筆づくり。



「鉄舟さんから筆づくりを教わりましたか」と尋ねると、「見て覚えろと言われるだけ」という臣さん(左)。「優しく教えてくれました」という祐太郎さん。息子には厳しくても孫には弱い2代目の微笑ましいエピソードが聞けた。

株式会社 竹宝堂

昭和27年創業の化粧筆工房。世界有数の化粧筆メーカーとして高い信頼を得ている。
安芸郡熊野町出来庭6-5-5
☎ 082-854-0324



筆司の技と熟練の職人たちの丹精込めた筆づくりで、多くのオリジナル化粧筆の依頼を受ける。工房を併設した本社1Fには直売店もある。



培った技術を継承し 熊野の“筆”文化を発信したい

世界遺産の島、宮島の桟橋から嚴島神社に続く参道に対岸を見渡して建つ宿「錦水館」。海軍御用達の武内商店として海に物資を運ぶなどその歴史は古く、旅館としての創業は大正元年(1912年)。100年以上続く旅館の6代目が武内智弘さんだ。

宮島で生まれ育ち、島独特の閉鎖的な雰囲気を息苦しく感じたこともある。しかし一度島を出てみると、宮島にしかない歴史や自然、文化の魅力に気付かされた。また家を離れ、自分のやりたいこと、好きなことは何かを考えた時、やはり人に喜んでもらえた方が好きだと再認識したという。島に戻って温泉の復活や別館の改装に尽力した5代目恒則さんを支え、6代目として事業を受け継いだ直後に口の大禍に直面した。看板と歴史、

「口ナ禍が収束したら何がしたいか」という問いに、多くの人が「旅」と答えていました。『いつか宮島に行きたい』『また宮島に来たい』と思ってくださっている方を万全でお迎えして、『来て良かった』と思つてもうえられた日まで、信頼できる従業員と錦水館に受け継がれた“おもてなしの心”を守りたいと思っています』



ひろしまの力



Passion enlivens an area

おもてなしの 心を受け継ぎ 宮島の魅力を守り伝える

株式会社 錦水館

創業百年の老舗温泉旅館「錦水館」と和モダンな「ホテル宮島別荘」の2つの宿を経営し、国内外からの観光客を迎える。

廿日市市宮島町1133
☎ 0829-44-2131



「大人のための宮島の我が家」がコンセプトの「ホテル宮島別荘」。3代目が桟橋前に建てた「宮島ロイヤルホテル和風別館」をリニューアルした。



ホテル宮島別荘／宿泊客専用ラウンジ・テラス

多忙な武内さんのストレス解消法の一つがカメラ。仕事の合間に縫って、様々な時間帯の宮島の魅力を切り取る。プロ級の写真と共にブログなどで宮島の魅力の発信を続ける。ホテル宮島別荘HP内「MIYAJIMA BLOG」